

命の責任に気づけた日

二年 青木愛実

私の家には八年間共に過ごした一匹の犬がいます。いつも家族の中心にいて、どんな時でも私たちに笑顔と癒しをくれるかけがえのない存在です。

そんな大切な家族がある日突然、撫でるだけでも「ギャンツ！」と鳴き、触られることを怖がるようになりました。その数日後には前足と後ろ足が動かしくくなり歩こうとしなくなりました。診断結果は「頸椎椎間板ヘルニア」。手術が必要とのことでした。

まさか、という思いでいっぱいでした。小さな体で手術が耐えられるのかの不安、術後の回復への心配、そして私たちが直面したのは、想像以上に高額な医療費でした。ペット保険に入っておらず、数十万円にものぼる費用に両親も戸惑いを隠せませんでした。

けれど、それ以上に私を苦しめたのは「もつとできることがあったのではないか」という後悔でした。うちの犬はぼつちやり気味で日頃の運動も足りていませんでした。足腰に負担がかかるフローリングの床も、そのままにしていました。高さのあるソファーに飛び乗る動きも日常的にさせてしまっていました。(少しの配慮や知識があれば、防げたかもしれない。)そう思うと、申し訳なさで胸が締めつけ

られました。

手術後は、幸いにもまた元気に歩けるようになりました。入院している間にフローリングにマットを引いたり、ソファーを高さのないものに交換したり生活環境を見直しました。また、肥満を改善するためにドッグフードの見直しも行いました。退院後、改善させた生活環境でおだやかに過ごす姿を見て、もう二度と同じことを繰り返さないと強く心に誓いました。

私たちが人間が動物と暮らす以上、その命に責任を持つことが必要です。食事や運動などの健康管理、生活環境の整備、保険の加入など、できる限りの備えをすること。それが、動物を「家族」として迎えた者の義務だと思います。

犬や猫は、自分で言葉を話せません。だからこそ、私たちがもつと目を向けて、気づいてあげなければいけないのです。「かわいい」だけでは、動物を幸せにすることはできません。本当の意味での愛情とは、命を守る努力を惜しまないことだと思います。

この出来事を通して、これから先、より多くの方が動物の健康や環境に関心を持ち、苦しむ命が減っていくことを願って私はこの経験を伝えていきたいと思っています。そして動物たちの小さな声にもっと耳を傾けて私たちに何ができるのかを考えていきたいです。

動物も、私たちと同じように「幸せに生きたい」と願っている。そのことを決して忘れてはいけなないと、私は心から感じています。